

峡南幼稚園・徳田和子さんインタビュー モンテッソーリ教育の子ども観は、 子育てのヒントに満ちている…

“教具”と呼ばれる教材を使って、
子どもが自ら選んで取り組む“お仕事”という活動が
モンテッソーリ教育の特徴。
そこには自然の理の中で自ら発達していこうとする
子どもの、“今”を大切にする考え方がありました。

徳田 子どもは無能な存在じゃない。生まれたばかりの子どもは正常で、そのことに無頓着な大人によって正常から逸脱にむかうことが多い。これがモンテッソーリ教育の創始者であるマリア・モンテッソーリの子ども観だと思います。私が初めてモンテッソーリのことを学んだ時、「えー」と思ったのですが…

編 今では同じ思いですか？

徳田 はい。モンテッソーリ教育っていうのは、子どもさんが自分で選んで、考えて、実行して、そして自分で終わるということを大事にしています。その終わる時の子どもさんっていうのは、非常に満足げで、いい表情を見せてくれます。

子どもは敏感期に成長する

編 「敏感期」というのもモンテッソーリの考え方の特徴ですね。

徳田 敏感期っていうのは、子どもたちが成長するために必要なものを環境の中で見つけて、そのことにとっても敏感に感受性を発揮する期間のことです。それに興味を示したら、もうやりたくて仕方がない。他のことは目に入らないくらい一

生懸命になる。様々な敏感期がありますが、子どもたちは敏感期が来るたびに、様々な能力を身につけていく訳です。

編 どんなものがあるんですか？

徳田 典型的なのは言葉の敏感期です。子どもたちは「あ」って言いなさいとか言われなくても、自然と言葉を習得していきますが、実は4ヵ月くらいの赤ちゃんはもう、お母さんの口元をよく見ています。またおっぱいを吸ったりして口をいっぱい運動させて、それで発声する準備をしているんです

編 目には見えないけど、しゃべる時の練習をしてるんですね。

徳田 やがて喃語をしゃべったり、「マ」とか、破裂音の「パ」とかが出てきます。子どもたちは言葉を話すことに、非常に喜びを持っていますね。言葉の敏感期は特に長くて12歳くらいまで続きますが、その間に字を書くとか、読むことにすごく興味を示す時期もあります。

編 書く方が先に来るんですね。

徳田 不思議なんですけどね。絵を描くのと同じような気持ちなんだと思います。年少さんくらいから始まるんですけ

ど、子どもさんによってずいぶん差があるので、その情熱につき動かされた時にするのが一番いいんです。そういう意味では、私たち教師も親御さんも、今この子が何をやりたがっているのかを観察するのがとても大事。

編 情熱が失せた時に「やりなさい！」とか言っても…

徳田 遅いということはありませんが、習得するのに時間がかかります。よくあるのが、お母さんがやってる料理や洗い物を子どもさんが「やりたい」って言っているのに、「危ないからあっちで遊んでなさい！」なんて言って、断ってしまうケース。その時にそれなりに工夫して一緒にやってあげると、子どもさんはきっと満足して「ああ、自分はこういうこともできるんだ」という自信にもつながっていくんですけど、普通はそうはさせてもらえない。特に今は大人が忙しすぎますし。で、ある程度大きくなってから「お手伝いしなさい」なんて言っても、色々理由をつけて断られますよね。

編 それも敏感期なんですか？

徳田 大人の真似をしたい。しかも本物

大人は子どもさんのすることを漠然と見がちですが、そこにはちゃんと理由があることが多いんです

を使って。そして手や体を動かしたい訳です。自分の体をコントロールしたい。でも上手にできないので、大人には何をしてるのかよくわからないということもあります。小さな穴に小石のようなものを落とすことを一心不乱にやっているのもよく見ますね。

編 一見ただのいたずらのようにも見えますが…。

徳田 「何でそんなことするの！きたない」っていうのが多くの大人の見方だと思いますが、モンテッソーリ教育では違う。その子は指先をいっぱい使って、物をつまんで、穴を狙って、落とすという複雑な手の動きを習得しようとしている。だからそれができるような教具を作ろうっていう考え方です。

編 秩序の敏感期というのもありますね。

徳田 2歳頃に始まり3歳で顕著になると言われていますが、自分の暮らす環境がいつも同じということに非常に敏感な反応を示します。いつもあるものがそこにないか、一日の流れがいつもと違うと、グズグズしたり甘えたりします。幼稚園でも、例えば教室のゴミ箱がいつもと違う場所にあるだけで、とたんに不安定になります。小さな子どもさんは、無秩序の中では成長していけないんです。特に家庭ではそれが大事。例えば大人が戸を開けっ放しにしているのを見てかんしゃを起こしたり、その都度閉めに行くような子どもさんがいますが、彼らがいかに秩序に敏感かってことです。

編 敏感期という視点で子どもを見ると、大人がそれまで単にいたずらだとか、こだわりだとかって思っていたことが、実は理由があるってことに気づけますね。

徳田 子育てもずいぶん楽になると思います。大人は子どもさんのすることを漠然と見がちですが、ちゃんと理由があることが多いんです。

編 他にどんな敏感期がありますか？

徳田 感覚の敏感期は、色や形、それから何かを触った感覚に感受性を示すものです。特に触覚は2、3歳の時に特別に関心を持つ時があって、色々な所をホン

トに一生懸命に触りたがります。触った感覚を確かめながら、感覚を研ぎ澄ませていくってことなんだと思います。この時期にこそ、泥んこと水とか木の幹とか、自然のものにふれてほしいですね。

編 やっぱり自然のものがいいですか？

徳田 それが一番だと思います。人間が作った物じゃなくてね。モンテッソーリ教育っていうと、教具を使って、何か知的な教育をしているって思われがちですけど、決してそうではない。教具はあくまでも木の枝とか石ころとか、自然のものを概念化したものなので、その前に自然の中にあるたくさん色や形や音、触った感覚を体験していた方がいい。



編 敏感期というのは、成長したいという生物の本能のようなものですか？

徳田 そう思います。本当にその時に、子どもさんが興味を示すことに取り組んでいけば、それが彼らの身についていく。すごく自然の理にかなったものだと思います。焦って先取りするのはあまりよくなくて、子どもさんの“今”の大切さを大人がわかってあげてほしい。私はいつも彼らのそういうエネルギーを感じていて、そこから色々教えてもらっている気がします。

“お仕事”で自分を作る

編 手先や体を動かしたいとか、五感を働かせたいという敏感期の要求に応えるための環境を、教具などを使って整えているのがモンテッソーリ教育だと思うのですが、そこで子どもが自分で選んで行う活動を「お仕事」と言ってますね。なぜ「お仕事」なんですか？

徳田 大人の仕事は終わらせるためにあるんだけど、子どもたちの仕事は自分を作るためにある。それで遊びとは区別し

て「お仕事」なんです。

編 「自分を作る」ってどういうこと？

徳田 以前、お友だちに乱暴してばかりで、一緒に遊ばない、教室でお仕事もしないという子が入園してきたんです。2ヵ月くらいそんな感じだったんですが、ある時「そろそろいいかな」と思って、厚紙に針で糸を通していく「縫いさし」というお仕事に誘ってみました。すると1枚やって、続けて一気に5枚くらいやってくれた。本当に満足そうな顔でしたね。それからその子は落ち着いて、以前のようなこともなくなったんですが、しばらくしてからふと「先生ありがとう」とって言いに来たんですね。私、最初は何が「ありがとう」なのかかわからなかったのですが、よく考えると、初めてお仕事に誘ってくれたことに感謝してくれたんですね。それはやはり、ただ単に縫いさしが面白かった、手が器用になったというだけじゃない、精神的な成長があったということなんだと思います。

編 子どもたちには、どんなふう成長していつもらいたいですか？

徳田 自分で選んで、自分で考えて、自分で実行する。人生はその繰り返しだと思うので、その中で自信を得るっていう生き方をしてほしいです。そしてそれだけじゃなく、友だちにも、弱い人にも、動物にも、思いやりの心で接することを身につけてもらいたい。幼稚園の子どもたちを見ていると、自信を得て満足している人は、他人にも自然とやさしくしています。モンテッソーリは、その教育が世界平和につながるって言っていたんですが、決して大袈裟でなく、私も今それを願っているんです。



徳田和子さん ● 峡南幼稚園副園長。上智モンテッソーリ教師養成コース一期生。1976年より峡南幼稚園勤務。モンテッソーリ教育の実践だけでなく、障害児の受け入れにも先進的に取り組んでいる。